

運動療法 その前に！ 運動器の臨床解剖アトラス

北村清一郎，馬場麻人 ● 監修
工藤慎太郎 ● 編

〔評者〕 秋田恵一（東京医歯大大学院教授・臨床解剖学）

「解剖学は本当に重要ですよ」。
多くの外科医や理学療法士をはじめとするセラピストに、こう言っていたことが多い。

このことは、本当に喜ばしいことだと思う。やはり、しっかりと解剖学的基盤の上に、診断法や治療法が構築されることが重要であるし、そのための解剖学であることは言うまでもない。

その一方で、解剖学（この場合は肉眼解剖学に限定）においては、他の学問分野ではありえないようなことが起きているということも理解しておかなくてはならない。もし機会があれば1800年代から1900年代初頭に出版された欧米の解剖学書の「絵」と、現代の教科書の「絵」を比較していただきたい。現代の解剖学の教科書のほうが、臨床的な重要性をさまざまな角度から示唆する「絵」が描かれていることがわかる。しかし同時に、実に多くの省略もなされているのである。解剖学的記述にしても同様である。重要なところを強調し、学習の効率化を図るための省略は、臨床的関連事項を強調するためにも合理的なことであり、重要なことではある。一方で、「絵」から見えているはずのさまざまな細かな線が消えてしまい、詳細な観察的記述も割愛されることにもなっており、それが常

識であり、真実として受けられているところもあるのである。生理学的・運動学的な臨床研究が日々進化するなかで、合理的につくられた教科書の知識が基盤となっているのであれば、ともすると学問的な障害にもなり得るのではないだろうか。

「人体の構造は単純ではなく、複雑なのである」という当たり前のことを理解するために、解剖学実習はある。本物に触れ、観察を通して、機能的理解を深め、さらなる応用を考えるための礎をつくることができる。ただ、多くのセラピストにとって、そのような機会を得ることは難しい。特に、本当に知りたい、理解したいと切望したとき、つまり臨床の場で悩みが生じたときに、すぐにアクセスすることはできない。

本書には、臨床で必要となるとき、いつでも本物に触れることができる多くの写真が収められている。課題となり得ることがすでに目次に示されており、課題に従ってさまざまな写真が示されている。1つひとつの写真をくまなく見ていただきたい。近年の解剖学書では省略されている、さまざまな筋束や構造を見いだすことができるはずである。本文の説明の行間を、写真の中に見いだしていくこと、それが、本書の醍醐味であ



る考える。

本書を手にとることによって読者の想像力が喚起され、深い洞察を呼び覚まし、実診療をさらに高めていくことにつながると期待される。本書の構成および解剖写真は、その目的に十分になったものであると感じる。読者の観察力が、本書の価値をさらに素晴らしいものとするはずである。その意味で、読み手も試されていると言える一冊である。

A4・376頁

2021年4月

定価：本体8,000円＋税

[ISBN978-4-260-04313-7]

医学書院刊